



紀平真理子のオランダ通信

第9回

なぜ日本人は Made in Japanに こだわるのか？(2)

プロフィール

1985年、愛知県名古屋生まれ。南山大学外国語学部スペイン語学専攻卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

日本人が「安全・安心だから」と国産品を選ぶのに対し、国産品を選択するよう努めているオランダ人の購入理由は異なる。30歳以上の収入レベルの高いオランダ人は、「国や地域の経済を支える」ためや「輸送距離が短いほうがCO₂排出量が削減できる」という観点から、国産品を選択しなければならないと考えている。この発想が昨今、ヨーロッパでトレンドの「Urban farming」（都市型農業）につながるのだと理解した。とくにオランダ人は、海拔0m以下に位置する国のため、地球温暖化による海面の上昇で国が沈むリスクを他国よりも懸念しており、環境問題に注力している。また、輸入食品の安全性に関しては昨年、ヨーロッパで馬肉トラブルがあったにせよ、「オランダ（ヨーロッパ）に入ってきている時点で安全であると信じている」という回答があった。これは、国民が検疫制度を信頼していることを表している。

一方で、20代の若い世代は原産国を気にせず、そもそも気にしようと考えたこともない人が多かった。大学生や大学院生は安くておいしいことに越したことはないというのがその主張で、「価格の高い理由が明記され、それに自分が納得でき、なおかつ味もおいしければ購入する。国産だから高いというのは明白な理由にならない」と論理的で実利的なオランダ人らしき全開で語ってくれる人がいた。

ただ、オランダ人やオランダに住む外国人にも購入NGの原産国があるのはたしかである。とくに有機栽培にこだわるグループには、政治的理由での不買運動や化学薬品を多く使用していると考えられる国（中国やアフリカがよく例に挙げた）からの作物はできるだけ買わないよう努めている人もいた。たとえば、中国産の野菜をイタリアで瓶詰めして「イタリア産」のラベルが貼られているケースや、アフリカで育てた苗をヨーロッパに持ってきて「ヨーロッパ産」とうたうケースから、原産国が信頼性を失ったことで購入NGになるという点は、日本人が食品トラブルが重なった中国産を好まない理由と同じだ。さらに話を続けると、「オーガニックの種や苗を使用しているとうたって



都市型農業の菜園。アムステルダム中央駅から10分ほどの距離に位置する。



Albert Heijn（スーパーマーケットチェーン）では1年に1回、すべての契約農家に消費者が自由に訪問でき、何でも質問可能なオープンデーを設けることで、消費者からの信頼を得、納得して購入してもらえるよう努めている。

いても農家の腕が悪く、化学薬品を多用しているケースもあるし、反対にアフリカ産と書いてあってもオランダの農家がアフリカに移住して育てた作物を逆輸入するケースもあるので、とにかく自分自身で判断することが大切だ」と冷静に教えてくれた。

一貫していることはオランダ人や外国人は立場が違えど、それぞれ自分の物差しで判断基準を設定し、実行していることだ。そして、自分の考えと異なる意見を聞いたとき、責めるのではなく議論をし、自分の考えに変えさせようとする傾向があることがわかった。他と違うことをいとわない、個人主義ヨーロッパならではの一面といえる。

今回は、日本人が国産品を好む理由と今後の展望について考察する。